

シグマ委員会幹事会

昭和50年度第1回会合議事録

日 時：昭和50年6月26日(木) 13時30分～17時30分

場 所：日本原子力研究所東海研究所 研究2棟222号室

出席者：塚田 甲子男(委員長, 原研), 百田 光雄(東北大)

久武 和夫(東工大), 中嶋 龍三(法大), 飯島 俊吾(NAIG)

松延 広幸(住友), 大竹 巖(富士), 桂木 学(原研)

西村 和明(原研), 五十嵐 信一(原研), 更田 豊治郎(原研)

欠席者：田中 茂也(原研)

配布資料：1. IAEA Advisory Group Meeting on Transactinium

Isotope Nuclear Data に関する資料

2. Recommendations from non-neutron nuclear data meetings held in 1974 に関する更田委員メモ

3. Proposed Japanese Distribution List for the FPND-Newsletter (25 June 1975)

議 事：

1. 核データセンター

核データセンターの組織要求経過の報告があった。シグマ委員会より日本原子力学会に、核データセンター設立についての要望書を原子力委員長と原研理事長宛出してもらいよう要請することになった。なお、昭和42年に学会より原子力局長宛に「核データの収集・整備の機関設置に関する要望書」が出されている。

2. IAEA Advisory Group Meeting on Transactinium Isotope Nuclear Data

1975年11月3日～7日、Karlsruheで開催され、五十嵐委員がReviewerとして招待されている。五十嵐委員よりプログラム内容について説明があった。なお、このAdvisory Group Meetingに日本からオブザーバーが出る予定があるかについての原子力局からの問合せにつき、大田、神田、西の諸氏にも問合せたが、幹事会出席者の周辺も含めて予定者がいないのが現状である。このAdvisory Group Meetingに関連する委員会内のcommunicationについて了解に差があるようであったので、事務局としては今後も連絡をより良くすべく努力してゆくことが表明された。

3. Non-Neutron Data 関係の扱い

資料2をきっかけとして、シグマ委員会の領域について討議されたが、委員会としての具体案は出なかった。

4. 2年報を日本原子力学会誌に投稿する件

12月号に掲載されるためには10月末日が切となる。松延・中嶋・大竹の3委員が編集責任者に決まった。

5. ガンマ線発生データ・ワーキンググループの結成について

高橋博委員にBNLへの夏期訪問より帰国後、人員構成など目安をつけてもらって、本委員会に提案してもらうこととなった。遅ければグループのスタートが来年度からとなるといったところが目下の見通しである。

6. 検索システムについて

7月18日(金)の燃料計量核データ専門部会において飯島(俊)委員がORNL、NDPの核データ収納フォーマットについて紹介することになり、この会合に中嶋・更田両委員も出席し、専門部会会合後、久武・中嶋・飯島・更田の4委員で今後の進め方を検討することになった。

7. 遮蔽データの扱い

炉定数専門部会と遮蔽委員会との間で話合いがあり、ENDF/B-NからORNLのAMPX-I(最近入手のコード)を使って遮蔽用炉定数を作成

することになっている。

もとの核データについて考慮する計画はこの件に関連しては出ていない。

8. FPND-Newsletter の配布リストについて

IAEA Panel on Fission Product Nuclear Data, Bologna, November 1973からの recommendationに従って, FPND-Newsletter が NDS/IAEA から発行(第1号が1975年10月頃で6ヶ月毎程度になる見込)されることになり, その配布リスト作成についてCCDNを援助するように更田委員宛 NDS より要請があった。事務局作成の配布資料3を検討し, この資料のリストに二者を追加することで了承された。

9. ワーキンググループの実行予算について

散乱法則 $S(\alpha, \beta)$ のデータを JENDL-1 に入れることに関連する計算外注費, FPのベンチマーク・テスト, 核分裂生成物生成率の計算依頼などがあげられたが, 8月中旬頃までは懸案とすることになった。

10. 人事

水田宏氏(NAIG)を本委員にとの提案については, 現在の委員数と飯島委員がNAIGであることなどを勧案して, 毎回でもオブザーバーとして出席して頂くことになった。

委員会の初期には委員の基準としては学識経験者ということが主であり機関代表的考慮はしないという考え方であったが, 委員会の範囲が広がり委員数も増えてくると, 機関あるいはグループ代表ということを考慮しないわけにはゆかなくなっているのが実情である。なお, オブザーバーのリストを用意して本委員会の案内を出すことを事務局で考慮することになった。

11. CCDN運営委員会, CCDNおよびNDS出張報告(更田委員)などは時間切れで省略された。

12. 次回本委員会

旅費の予算を考慮して本委員会は年3回を予定することとし, 次回は9

月を予定することとした。